

個性をみとめる

1. 教育と考える一言

「みんなちがって、みんないい」

1. 背景

私と小鳥と鈴と

私が両手をひろげても、お空はちっとも飛べないが
飛べる小鳥は私のように、地面を速くは走れない。

(中略)

鈴と、小鳥と、それから私、みんなちがって、みんないい。
(『さみしい女王 新装版 金子みすゞ全集・Ⅲ』145頁)

金子みすゞの「私と小鳥と鈴と」に出会ったのは、小学3年生の時です。担任の先生が、「みんなちがって、みんないい。」という言葉をととても気に入っており、私たちの学級目標でした。その当時、私はこの詩にあまり惹かれず、特に思い出すこともなく、大学4年生になりました。4年生のとき、私はとても大きな挫折を味わいました。そこで、ふと「みんなちがって、みんないい。」という言葉を読み出し、個性を尊重することの大切を感じました。

2. 考察

担任の先生が、「みんなちがって、みんないい。」という学級目標から私たちに何を伝えたかったのか。その一つは、自分とは違う他者を認め尊重することの大切さだと思います。私のクラスには、発達障害があるAさんがいました。それまで、どうしてクラスみんなができることができないのか理解できず、Aさんを差別していました。先生はみんなに自分の得意なこと苦手なことを考える時間をつくり、自分は苦手だけどAさんにとっては得意なことがあることを教えてくれました。そして、私は、Aさんに対して差別的な気持ちはなくなり尊敬するようになりました。もう一つは、自分の個性を認識し自信を持つことの大切さです。私は、大学4年生の時に、研究がうまくいかず、自信をなくしてしまいました。実家に帰ったとき、「みんなちがって、みんないい。」という言葉を読み出し、研究はうまくできないかもしれない、でも自分は他で何かできることがあるはずだ！と思い、自分に自信を持つことができました。

日本の教育は、ポスト産業社会に対応すべく、標準化・画一化されつつあると思います。また、自分とは違う他者を認めようとしめない差別意識が根強くみられます。私は、生徒の個性を尊重し、他者を尊重することの大切さ、自分に自信を持つことの大切さを教えることができる教員になりたいです。

引用参考文献

池嶋洋次『金子みすゞ 詩と真実』勉誠出版、2000年